

季語の可能性

－「夏めく」と「風薫る」－

松井 貴子

はじめに

チェコ南部で日本人が主宰するチェコ人俳句会である月見草俳句会で、日本の季語と、その例句への理解を進めつつ、チェコらしい季語を確立する試みがなされている。

主宰の尾形祐美氏の「夏めく」と「風薫る」という季語を兼題として句会を開くという計画に際して、日本の季節感とチェコの季節感を、どのようにつなぐことができるか、考察を試みた。

I 「夏めく」という季語

「夏めく」という季語について、日本の歳時記には、次のように記述されている。

新緑、若葉の美しい頃である。春の花がおわり、夏の花、花菖蒲、あじさい、くちなしなどが咲く。活気ある夏のはじまりである。

〈本意〉四季のことばに「めく」をつける言い方であるが、夏めくも、夏のはじめの頃の、夏らしくなった様子をさす。夏の色、夏景色などともいう。「夏浅し」もこれに近い。¹

「夏めく」の類季語として、「夏兆す」という季語も挙げられている。

1 「夏めく」の国内詠例句

歳時記には、季語の解説に加えて、その季語を使った例句が収録されている。尾形氏の翻訳を通して、月見草句会のチェコ人会員の季語理解の助けになるよう、チェコの季節感を視野に入れて、一句ずつ評釈を加えた。

夏めくや何か足らざる空の隅 宇陀草子²

この句は、何が足りないか、わかれば面白い

かもしれないが、作者は何かの不足を感じているのだな、くらいの理解でも十分であると思われた。足りなさを感じているのは空の隅であるので、空の中心には不足はなく、それなりに足りているのであろう。夏の光か、夏の空色か、特定はできないが、空全体には、まだ満ちていない、夏めいてはいるけれど、夏には足りていないと見えているのかもしれない。

日本人が月を愛でる感覚として、中国的に満月を名月として鑑賞するだけでなく、十五夜に足りない十三夜の月見を行い、満月を過ぎた十六夜にも目を向けるということがあり、月以外の自然現象にも、盛り（句）だけでなく、走りや名残りを楽しむ感覚がある。

この句でも、夏が満ちてきたと感じるよりも、本物の夏というには足りないものがあるということに意識が向いて、隅っこや不足感に注目して詠んでいるのではないかと思われる。足りないのは、季節変化についていけない作者の感覚、季節認識かもしれない。

磨く匙きらりと水に夏兆す 山下喜子³

「夏兆す」は5文字なので、そのまま使いやすい季語である。「夏めく」だと、助詞をつけて上五、下五にするか、3文字の何かと合わせて中七にするかになる。

この句では、匙を磨くことが苦痛ではなく、金属の冷たさ、匙の銀色が持つ冷やかさを快く感じ、金属と水が反射する光がきらりと、強さを増している。これらすべてが夏を感じさせるものとして句に提示されていると思われる。冬には感じられない感覚で、春や秋だと、心地よく感じるには早すぎたり、遅すぎたりするが、給湯器が普及した現在では、失われた感覚になっているかもしれない。

日本の夏は暑いので、冷房が十分でなかった頃の日本人は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚を動員して、涼しさを求めていたと思われる。チェコでも、体感温度（触覚）以外の感覚を使って、暑さ、寒さ、暖かさ、涼しさを、積極的に感じようとする意図があれば、日本と季節感覚を共有することができるであろう。

2 「夏めく」の海外詠例句

「夏めく」は、作者の体感に由来する季節認識であるので、それを感じる場が、日常であっても、非日常であっても、句を作ることができる。日本以外の土地でも、この季語を使って、多くの俳句が作られている。日本人が日本で詠んだ例句に加えて、日本人が海外で詠んだ例句についても考察を加えた。

潮風のとみ頓に夏めくデッキかな 矢田挿雲
インド洋船上⁴

潮風、夏めく、デッキは、やや付き過ぎに感じられるが、南洋を航海した実感を素直に詠んだ句である。日本人の海外詠では、自分が見ているもの、自分が経験していることが、自分にとって珍しいものであるので、非日常の句材として認識されるのであろう。海外旅行中の作者は、毎日が興奮状態で、非日常、冷静さを失っているため、より直接的に詠むのではないかと推測される。国内詠ではベテランであっても、海外詠では初心者のようになることがあり得る。異質さを感じる状況に対峙して、自分の五感がとらえたものを素朴に提示することで句にしているのである。

チェコ人が日本の季節感と向き合うとき、知らない、わからないと拒否する気持ちが起こることは止められないが、日本人の海外詠と同じように、いつもと違う違和感を非日常として楽しむことで、自分が詠む句の世界を広げることができるであろうと思われる。

非日常を受け入れることは、新しいことを見つめる感覚を磨き、日常の中で見過ごしている非日常を発見することは、俳句を面白くする大切な要素である。

実体験がなくても、人は、知識や経験をもとに

して、想像や推測をすることができる。自分の日常に重なる部分を見出して、経験を共有することができる。俳句を作るうちに、日本の季節感を知りたいと思ってもらえればよく、日本の季語を金科玉条のような位置づけにしないこと、チェコで俳句を作るときに、日本の季語を、チェコの季節感覚より優先しないことが、チェコと日本の季節感覚の融和に必要なことであると思われる。

サーモンの躍る気配に夏兆す 川村暮秋
アメリカ・シアトル・ワシントン州⁵

サーモンだから夏を感じるのか、魚が躍るから夏を感じるのか、いずれもあり得ると思われる。江戸時代の日本人が、初鯉に初夏を感じたように、サーモンが川に戻ってくることで、夏が来たと感じる人もいれば、特にサーモンでなくても、魚の躍動感に夏の訪れを感じる人もいるであろう。

鮭が川に帰ってくるのは、日本では秋であり、緯度の高いシアトルでは、カレンダーで夏でも、気温は日本の秋に相当することが多いかもしれない。鮭の季節感を共有できない場合は、魚の生命力が増していることで夏を感じることになるので、サーモンである必然性は薄れる。シアトル近郊にサーモンの孵化場があり、ワシントン州の名産品であるが、この句の本質（作者が何に感動したか）は、動物の生命力に夏を見出したことにあって、鮭の季節感やシアトルの土地柄を知らなくても、共有できる季節感覚であると思われる。

3 「夏めく」の本意

「夏めく」という季語には、夏が来たことを意識する、という本意があるので、チェコで使うなら、チェコ人は何によって夏を感じるか、を探すことから始めて、日本の夏との共通点、相違点を考えると面白く感じられるようになるであろう。

春をどのようにとらえていて、そこからの変化をどのように感じるか、春と夏の違いは何によってもたらされると思うか、春と夏で、日常生活にどのような違いがあるか、などを考えていくと、夏のイメージがふくらむ。夏と秋についても、同じように考えてみると、さらに夏の特徴が見えてくる。夏と冬を対比することによっても明瞭にな

るであろう。日本の方がチェコより暑さが厳しく、夏のとらえ方がチェコと違うかもしれないが、夏をどのように感じるかは、春と秋をどのように感じているか、春、秋と連続する夏との差異をどのように意識しているかによっても、決まるのではないかと思われる。

例えば、俳句を作るときの私は、「夏めく」を、寒さを全く感じなくなってから感じるが、寒がりでない人は、もっと早くから夏を感じるであろう。都市に生活している暑がりの人には、夏めくことはマイナスの感情を抱かせるものになり得る。農業をする人には、夏は作物がよく育つ季節として嬉しいものであると同時に、干ばつや洪水を警戒する時期でもある。

日射しの強さは、季節の変化を感じさせるものであるが、チェコと日本で、それぞれに、冬から春、春から夏、夏から秋へ変化している。チェコと日本、両方の季節変化を体感していれば、日射しの変化が大きく感じられるか、ゆるやかに感じられるか、春の日差し、夏の日差し、秋の日差しを、どのような感情とともに感じるか、など、チェコと日本で同じように感じられること、感じられないことを、実感を持って認識することができる。そして、そこから、チェコ人の季節感覚と日本の季語の感覚をつないでいくことができる。

日射しに限らず、他の季語が包含する季節感覚についても、日本の感覚とチェコの感覚を、そのまま併存させて、その上で、両者がつながるところをチェコ人と共有し、つながらないところは、ひとまず知識として頭に置いてもらう、という感じで、季節感を共有していくことができるのではないかと思われる。日本の季節感が絶対ではないし、チェコの季節感より優位に置くべきものでもない。季語の知識は不要というチェコ人には、無理強いはしない方がよい。

日本の歳時記で夏を感じる花とされている花菖蒲や紫陽花が、チェコでは一般的ではなく、夏を感じられるものでなくても、問題はない。日本では、そのような花で夏を感じることになっているらしいと、植物図鑑を見るだけでも十分である。

花菖蒲や紫陽花は、梅雨と結びついて、「山滴る」の季語のように、日本の夏の特徴である水分の存在が感じられる季語になる。初夏の湿度に

は、盛夏の多湿や冬の乾燥に比しての快さがある。

何かの花によって夏を感じることは、チェコ人の日常感覚にもあるであろう。その花が、日本でも知られている花であるなら、季節感を共有することができる。なじみのない花であったら、その花の何が夏を感じさせるのかを考えることで、季節感覚の共有（理解）につながっていくと思われる。

チェコでの季節感覚を、分析的に眺めてみると、その本質が見えてくるであろう。

「夏めく」俳句を考えているうちに、チェコのイメージで一句を作ることができた。

尖塔の光と影や夏めく朝 貴子

この句の背景には、木下闇という季語がある。夏は日射しが強いので、それだけ、光が作る影が濃く、夏の木の下には、夏なのに、闇のような暗さがあるという季語である。

尖塔としたのは、ヨーロッパの建築に多いので、違和感を生じさせにくいであろうと考えたためであるが、作者としては、見上げる高さにあるものであればよく、丸くて面積のあるものよりは、細長く、尖りのあるものをイメージして、思いを重ねた。

尖塔に日が当たり、それに応じてできる影が、より暗く見えたことで、日射しが強さを増して、夏が来たことを感じたという句である。朝としているのは、日中より弱い朝日によって光と影の対比の強まりを感じたことで、夏日の強さを、より印象的に感じ、同時に、もっと早い時期から、より明瞭に明暗の対比が見えるはずの昼の日で、夏めく光と影に気づかなかった自分の鈍さに、多少ショックを受けているという心持を表現した。下五を6文字にして、すっきりしない思いを溜めている。それを、朝という語（開放的な母音「あ」+鋭さと軽さのある「さ」）で逃して、句を収めた。これは、挙句（俳諧の末句）の感覚に通じるかもしれない。

II 「風薫る」という季語

「風薫る」という季語について、日本の歳時記には、次のように記述されている。

青嵐は視覚を中心においている風だが、これは嗅覚に焦点をおいている。青葉、青草を吹く風が

その香りをはこんでくると感じている。やはり南の風である。

〈本意〉南の風の気持ちよさをあらわす季語。「薫風南より来る」などと中国の詩文にも使われている。芭蕉も「風薫る羽織は襟もつくろはず」「ありがたや雪をかをらす南谷」などと愛用している。⁶

夏の風と、夏の木々の葉が作り出す季語で、視覚に訴えてくる「青嵐」に対して、「風薫る」は、嗅覚の季語である。「薫る」は、現実には芳香が存在する「香る」に対して、比喩的な語であるという。

1 「風薫る」の国内詠例句

「風薫る」の季語も、歳時記には例句が収録されているが、国内詠と同じくらい海外詠が見られる。

薫風や蚕は吐く糸にまみれつつ 渡辺水巴⁷

この句で詠まれているのは、帯や着物になる正絹の原材料となる糸を、蚕が作り出している様子である。糸として紡がれて、織りや染め、刺繍や箔が施されて、完成した美しい製品からは、想像もつかない光景であろう。上五の「薫風や」の季語が、句の全体を覆うことで、生体の蚕が活動する生々しさが消えて、日本画のように見えてくる句である。

薫風に一切経の櫃並ぶ 高野素十⁸

梅雨入り前に、経典の虫干しをしていることを詠んだ句である。この句でも、薫風が、櫃に入った経典に纏わりついている湿気や埃の存在を打ち消して、経典を、紙という物質ではなく、そこに込められた思想や観念を体現しているものとして、その存在感を感じさせる効果をもたらしていると思われる。

薫風の大樹の言葉渚まで 松沢鋳江⁹

夏の風が大樹を渡り、それが、葉擦れの音を載せて薫風になっていることを詠んでいると解釈した。自然が作った音を「言葉」として擬人化しているところが、日本的な感覚による表現であるか

もしれない。薫風が渚まで吹いて来て、海風、川風、湖風、いずれかは決めかねるが、風に出会って、言葉を届けて、伝えたかのように、二つの風が合流するのが見えたのであろうと思われる。

海山ゆ絶えざる風の薫るなり 中川宋淵¹⁰

「ゆ」は、「経由する」という意味の上代語である。夏の海や山で、止まることなく風が吹き続けていて、潮の香や草木の香を吸い込んで、薫風になって、地上にいる自分たちのところにやってくると、見ているのではないかと、作者の創作意図を推測した。

薫風の海山を眺めているとも読めるが、傍観することにとどまっていると、嗅覚を刺激する薫風の特徴が活かないので、自分のところで吹く薫風と、それが生まれるところを結びつけていると解釈した。

寝れば広きわが胸を打つ野の薫風

香西照雄¹¹

仰向けに寝ると自重で胸部が広がって力が抜ける。立っていたり、座っていて、上体が起きると、猫背の癖が出たり、何か心に鬱屈するものがあって俯き加減になったり、負担のかかる姿勢になることがある。仰向けに寝ることで、立位や座位のときに比べて、重力から解放されて、それまで胸を圧迫していることに気づいたのであろう。身体的に解放感を得たことで、薫風を感じる心の余裕が出たのである。

「胸を打つ」のは、心臓の鼓動である。横になったからこそ、しっかりと感じられている。薫風が胸の上を吹き通って行くとき、心臓の拍動に連動して揺らいでいるように感じられたことを表現しているのであろう。野の広さと胸の広さも連動していると思われる。

薫風や神への誓い美しき 榎本摂子¹²

ジュンブライドの結婚式を詠んだ、お祝いの句であろうか。6月に結婚する花嫁には幸運があるというジュンブライドの考えは、欧米から日

本に来たものである。この句は、日本の結婚式よりも、チェコの結婚式の方が似つかわしい。

2 「風薫る」の海外詠例句

海外詠になっても、「薫風」は、違和感なく句に収まるようである。自分の感覚が呼び覚まされたことが、句を詠む動機であるため、自分が句の中心にいられるのであろうと思われる。

薫風やすつきり立てる聖母像 近藤幸枝
ブダペスト・マーチャーシ教会¹³

マーチャーシ教会は、ブダ地区にあり、聖母マリア聖堂ともいう。13世紀の創建当時に作られた聖母像があり、オスマン帝国に占領された時期にはモスクとして使われた歴史がある。その間、聖母像は、壁の中に隠されていた。壁が破壊されて聖母像が現れ、それによってオスマン帝国の支配が終わったという。この教会は、聖母マリアの奇跡があった場所とされている。

聖母像に対しては視覚、薫風に対しては嗅覚が働いて、作者の中で「すつきり」という感覚によって一句にまとめられている。大理石で作られた聖母像は幼子のイエスを左手に抱いている。石の白さも、作者の感覚を刺激したことであろう。

薫風やポスト真白にサンマリノ 中野弥生
サンマリノ・政府庁舎前¹⁴

サンマリノは、イタリア半島北東部の山岳地帯にあり、世界最古の共和国であるという。周囲をイタリアの国土に囲まれ、イタリアとの関係が深い。都市国家といえる規模の共和国である。

日本とは違って、ポストが赤くないことが作者の目を引いて、日射しを反射する「白」が、夏らしさと、風の心地よさを印象づけたのであろう。サンマリノの夏は、雨が少なく、乾燥している。アドリア海を臨む高地のサンマリノの風は、高温多湿である日本の夏の風より乾いていたのであろう。その快さが、薫風と、とらえられたのである。

薫風や風車連立する運河 松浦克子
オランダ・ザーンセスカンス¹⁵

ザーンセスカンスは、アムステルダム近郊にある観光用の風車村である。水路として使われるザーン川に沿って、数基の風車が並んでいる。この地域は、かつては古くからの工業地帯で、600基以上の産業風車があったという。第二次世界大戦後に、失われていく風車を保存するために、各地から移築されて風車村が作られた。ザーン川の橋の上から、これらの風車を一望することができる。

オランダらしい絵になる風景が詠まれた句である。「連立」という語を、擬人化して解釈するならば、薫風に吹かれて、風車も、隣にいる友達の風車と一緒に、夏を楽しんでいると読むことができる。

薫風にドン・キホーテの鼻とがる 吉田清子
マドリード¹⁶

マドリードのスペイン広場に、騎乗したドン・キホーテと従者サンチョ・パンサのブロンズ像がある。その背後から、作者セルバンテスの石像が、見下ろすように置かれている。西洋人をリアルに表現した銅像であるので、ドン・キホーテの鼻は高く作られている。見慣れた日本人の鼻よりも、ずっと高い鼻を見て、尖っていると形容したのである。中世の日本人が、スペインやポルトガルから来た南蛮人を見たときも同じ反応をしたであろう。

薫風を感じる感覚と、鼻に尖りを感じる感覚の結びつきに合理的な必然性はない。その場に存在していたものから、作者が選び出して、取り合わせた結果の一句である。

風の香や時計の町を透明に 久保田慶子
スイス・ジュネーブ¹⁷

スイスは時計産業の国である。ジュネーブには、高級時計ブランドの本社、本店が集まっている。その歴史は、16世紀に遡る。フランスで、カトリックがプロテスタントを弾圧したため、多くの時計職人がスイスに亡命した。当地の金細工職人とともに、時計を作り、産業化されていった。

「風の香」は「薫風」より、ほのかな感じがする。精密機器が作られる土地には、その方が似つ

かわしいのかもしれない。控えめに香る風が、時計工場のある町の塵埃を清めているように感じられたのであろう。そうして、時計作りに欠かせない澄んだ空気と水が保持される。それを、「透明に」と形容したのである。

3 「風薫る」の本意

「風薫る」と感知するとき、本当に、風が薫っているかどうかは、大きな問題ではないように感じられる。この季語は、視覚が嗅覚を呼び覚ましている、あるいは、視覚情報が嗅覚情報に変換されている状態を表していると思われる。

「風薫る」は、心地よさがあって、使いやすい季語である。私は、俳句を作り始めて、まだ年数が経っていない頃から、この季語を、よく使っていた。

薫風を隣家よりもらふ仮住まい 貴子

この句は、大学に入るために、実家を出て、アパートで独り暮らしを始めた初夏の句である。窓を開けると、隣の家々の庭の木々が見えて、借景のように眺めていた。学生が借りている住まいは、永住する所ではないと思っていて、実家にいたときの感覚とも比べて、「仮」という意識が強くあったが、薫風の存在によって、ひととき、自分の居場所を認識したことを詠んだ。

日本では、薫風は、梅雨入り前の青葉の美しさが作り出す。そして、梅雨時、梅雨明け後と、薫風は変化する。梅雨のないチェコでは、梅雨を前提とした日本の薫風とは異なると思われるが、梅雨がないことで、日本より長い期間、安定した薫風を楽しめるであろう。

現場で吹く薫風が、自然科学的に異なるものであっても、薫風であると感知する感覚に共感することで共有できる季語であると思われる。

4 チェコ人が詠む「風薫る」

2021年6月に開かれた月見草句会で、「風薫る」が兼題に出された。¹⁸句会名の月見草は、チェコ語で、PUPALKA プパルカである。

VRÁCÍM SE DOMŮ

VÍTR ZAVONĚL
BEZINKAMI

帰り道風が薫らせるニワトコや 失名

(語釈) VRÁCÍM SE 帰る
DOMŮ 家に
VÍTR 風
ZAVONĚL 薫った
BEZINKAMI ニワトコ¹⁹

作者不詳のため、失名と記している。チェコの作者がとらえた薫風は、ニワトコの白い花の香りである。日本の薫風は、草木の青葉が主体である。「風薫る」が、嗅覚を刺激する季語として認識されるとき、葉よりも花の芳香の方が、より強く意識されるのであろう。花のシロップが連想されると、味覚も刺激される。

Zbyněk Mrvík
MEZI KLASY
VÍTR NESE VŮNI
TVÝCH VLASŮ

稲穂の間風運ぶ君の髪の薫り
ズビニェック・ムルヴィーク

(語釈) MEZI 間
KLASY 稲穂
VÍTR 風
NESE 運ぶ
VŮNI 薫り
TVÝCH 君の
VLASŮ 髪

この句に詠まれた薫風では、植物と人が協働している。日本の季語が持つ伝統的な本意や例句に拘らず、季語が作る句の世界を広げている。

Petra Dudáková
KAPKY DEŠTĚ
RAZÍTKUJÍ DLÁŽDĚNÍ
I VÍTR VONÍ

雨の印石畳に降り風薫る

ベトラ・ドゥダーコヴァー

(語釈) KAPKY 雫、粒

DEŠTĚ 雨

RAZÍTKUJÍ 印をつける、印を押す、
スタンプを押す

DLÁŽDĚNÍ タイル、石畳

I ～も

VÍTR 風

VONÍ 薫る

この句の薫風には、雨に湿った土埃の香がある。乾いた状態から変化することで感じられたものである。チェコの夏は、日本のように多湿ではない。石畳は、未舗装の地面のように水を含まない。チェコの環境が作り出した薫風の表情である。

おわりに

有季定型の俳句で、季語が大切なのは確かであるが、それ以上に、作者が、何を発見して、どのように感動したかを表現することが重要である。季語は、日本文化や日本文学の長い歴史を背負っているため、多くの情報を内包する重い言葉である。一句の中で、それに釣り合うだけの内容を取り合わせなければ、互いに響き合うことができず、季語が浮いてしまうことになる。日本人であっても、海外で日本の季語を使って俳句を詠むときには、その季語が内包する伝統と、どう対峙するかという課題が強く意識される。

一方で、日本の風土を知らない外国人が日本の季語を使うときには、季語の伝統が重荷とならず、新たな作品世界を作り出すことができる。

日本の気候風土と異なる土地で、歴史や文学、文化が異なる環境で、日本の季語の伝統に並立し得るものを見出して取合せ、両者が響き合って、新たな世界を創出することが、理想である。

本論文は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)女性教員海外派遣制度」(2020年10月～2021年3月)による研究成果である。

¹ 『新歳時記(夏)』11頁

² 『新歳時記(夏)』12頁

³ 『新歳時記(夏)』12頁

⁴ 『世界大歳時記』72頁

⁵ 『世界大歳時記』72頁

⁶ 『新歳時記(夏)』36頁

⁷ 『新歳時記(夏)』36頁

⁸ 『新歳時記(夏)』36頁

⁹ 『新歳時記(夏)』36頁

¹⁰ 『新歳時記(夏)』36頁

¹¹ 『新歳時記(夏)』36頁

¹² 『新歳時記(夏)』36頁

¹³ 『世界大歳時記』81頁

¹⁴ 『世界大歳時記』81頁

¹⁵ 『世界大歳時記』81頁

¹⁶ 『世界大歳時記』81頁

¹⁷ 『世界大歳時記』81頁

¹⁸ 原句はチェコ語で、日本語訳と語釈は、尾形氏による。

¹⁹ チェコでは初夏には香りのよい白い花を摘みシロップにし、秋には実を摘みシロップやジャムを作る。その辺に生えている一般的な木である。

参考文献

角川文化振興財団編 ふるさと大歳時記別巻

(1995) 『世界大歳時記』角川書店。

平井照敏編(1989、1996改訂版) 『新歳時記(春)』河出書房新社。

平井照敏編(1989、1996改訂版) 『新歳時記(夏)』河出書房新社。

平井照敏編(1989、1996改訂版) 『新歳時記(秋)』河出書房新社。

平井照敏編(1989、1996改訂版) 『新歳時記(冬)』河出書房新社。

平井照敏編(1990、1996改訂版) 『新歳時記(新年)』河出書房新社。

角川書店編(1973、1977 7版) 『図説 俳句大歳時記 春』角川書店。

角川書店編(1973、1977 7版) 『図説 俳句大歳時記 夏』角川書店。

角川書店編(1973、1978 6版) 『図説 俳句大歳時記 秋』角川書店。

角川書店編(1973、1977 6版) 『図説 俳句大歳時記 冬』角川書店。

角川書店編(1973、1978 5版) 『図説 俳句大歳時記 新年』角川書店。

Seasonal Feeling in Early Summer: 'A Summerlike Atmosphere' and 'A Greenly Gentle Breeze'

MATSUI Takako

Abstract

What makes us feel that summer begins? For example, the fresh green of young leaves lets us know that summer has come. Japanese people also notice the change of the season from spring to summer when they find that Japanese Irises and Japanese Hydrangea are in flower. In the Czech Republic, people also could know the beginning of summer with some summer flowers because both countries have four seasons.

Natsu-meku, or a summerlike atmosphere, is a widely known summer seasonal word. This seasonal word enables haiku poets to compose haiku applying their sensibility. They enjoy their creative activity in foreign countries as well as in Japan.

Another attractive summer seasonal word is *kaze-kaoru*, a greenly gentle breeze. It comfortably stimulates our sense of smell. The breeze brings the fresh smell of green leaves. Japanese haiku poets like using this word during their journey even outside Japan. Their haiku describe the beauty of these places, the statue of Saint Mary in the church in Budapest, a white postbox in the Republic of San Marino, and the windmills as historically conserved properties in the suburbs of Amsterdam with the refreshing breeze.

Because Japanese summer weather is high temperature and humidity, people in Japan suffer from it. They prefer a cool and refreshing feeling and seek it with their five senses. Because the summer in the Czech Republic is milder than in Japan, people in the Czech Republic can enjoy the summer breeze for a longer time. They would catch the wonderful summer with their senses.

Japanese people and Czech people could share seasonal feelings in summer and express them in their haiku. This creative activity embodies the internationalization of haiku.

(2021年11月1日受理)